

『成形成説』版本考

丹 羽 謙 治

1. はじめに

『成形成説』は、島津家二十五代当主島津重豪の命により、曾槃・白尾国柱等が編纂した農業百科事典ともいべき書物である。当初は百巻を予定していたが、二度に亘る江戸の大火、薩摩藩の財政窮乏、あるいは薩摩藩内の政争等々の事情により、実際に刊行を見たのは三十巻三十冊であり、以後の巻は写本として現在に伝わるのみである。

ともあれ、刊行された三十巻三十冊の版本は、現在各地の公私立図書館等に所蔵されており、『国書総目録』『古典籍総合目録』によると五十余点の存在が確認できる。しかし、大部の刊行物のせい、また農書としてその科学的な水準の高さのみが本書の意義とされてきたためか、その版本を詳しく調査する試みはなされてこなかった。せいぜい色刷本が大名・貴族への配り本であり、無彩色本と区別される旨の言及があった程度にすぎない^①。本稿は、『成形成説』の版本の書誌調査に基づき、その成立過程に私見を加えるとともに版本の種類を整理することを目的とする。

文化初年に本書（の一部）が刻成し、重豪に呈上される。以後幾度も刷りを重ねる訳だが、明治に至るまで同一の板木で摺刷されたことをまず確認しておきたい。摺刷や板木の移動によって生じた板木の欠損はその時々^②に修補されていくが、総体的には同一の板木で刷り続けられたことが書誌調査から確認できるのである。それは、板木が完成した段階で付けら

れたと思われる匡郭の切れが、明治刷の本にもあることから明らかである。本稿で問題とするのは、基本的に『成形図説』の刷りの前後関係ということである。

因みに、『成形図説』の膨大な数の板木は、火事や戦争で烏有に帰したかあるいは破棄されたか不明ながら、行方はわかっていない。

2. 『成形図説』版本の成立について

本書は、島津重豪がはやくから計画を立てて家臣に編纂を命じていたものだが、寛政四年（一七九二）に曾槃が侍医になるに及んで編纂は大きく進捗することになる。同十一年（一七九九）には国学者の白尾国柱を加え、「童蒙といへども九穀の種類採取および百薬の粹戾良毒を分別して救餓濟急の法方をしらしむる」（提要）ため、全百巻を目標として編纂が続けられていった。しかし、この編纂事業は天災や政争による藩内の混乱等のために困難を極めた。近世後半期の薩摩藩の博物学について総体的に記述した上野益三『薩摩博物学史』から、本書の成立に関する部分⁽²⁾を抜書きしてみよう（便宜上「A」～「C」の記号を付す）。

「A」文化二年五月にその最初の二十巻を藩主重豪に呈上している。これは上梓三十巻のうちの版本で、残り十巻はおくれた。世上伝本に二十巻本と三十巻本とがあるのはこのためであろう。「此書鏤版なりしに」と曾槃が書いているから、版本は四十巻分までできていたのであろう。ところが文化三年丙寅（一八〇六）三月四日巳^みの時（朝十時前後）、高輪泉岳寺にほど近い大木戸の西、高輪車町から出火し、烈しい南西風のため、猛火は北へ北西へとひろがった。：（中略）：薩摩藩芝の本邸、西邸は、ともに烏有に帰した。まだ江戸に滞留していた白尾国柱は、この危急の事態を

次のように書き留めている。「吾ハ西邸ノ土蔵ニ板木六百枚ヲ運ビ納メテ封ジタリ。外ハ纏^{まとい}、内ハ急迫セルコト知ルベシ。藩邸内ノ倉^{ソウベシ}（扶持米ぐら）ハ半バ灰滅セシガ、幸ヒ成形図説ノ土蔵ハ（残）存セリ。」（もと漢文）、このあと四月朔日に国柱は江戸を辞して帰国した。この文を読めば、『成形図説』の版本は辛うじて無事であったことがわかる。…（中略）…『成形図説』が実際に大きい打撃を受けたのは、文化三年より二十三年後の文政十二年己丑（一八二九）三月二十一日の大火である。…（中略）…隅田川右岸に沿って南下した火は、明石橋に近い曾槃の家を焼き、暦年の自著がごとく灰燼に帰した。印板十卷分、底稿なども含まれた。この時、槃は七十三歳である。それより二年後の天保二年に、槃は悲愴な一文を草して、永年の『成形図説』編集の苦心を回想している。

…
〔B〕『成形図説』の整版印刷はすべて江戸で行い、その三十巻が文化元年甲子（一八〇四）十一月に刷り上った。この本は「鹿児島藩蔵版」と題し（見返し）、それよりのちの流布本が「薩摩府学蔵版」と題するのと異なる。

…
〔C〕版本三十巻のうち、はじめの一―十四巻は、本書作製の骨子をなす農事部であり、卷十五至二十は五穀部、卷之二十一至三十は菜部である。農事部が五百二十六丁、五穀部二百七丁、菜部三百四十二丁、合計一千七十五丁である。文化三年三月の火災のとき、白尾国柱が土蔵中に封じた板木約六百枚は、一丁分一枚として、二十巻分の刻版に相当するものの如くである。…

右に引用した『薩摩博物学史』の記述には、時系列における経過はよく整理されているものの、前後に矛盾した記述や曖昧な記述が見られることに気づく。たとえば、〔A〕で文化二年に二十巻分（の版本）が完成し、翌年の江戸大火まで

に板木が四十巻まで完成していたのであろうといいながら、「C」で白尾国柱が土蔵に封じた板木を二十巻分と推定しているが、もしそうだとすれば残りの二十巻分はどうなったのか（焼けたのか）という問題が残ってしまう。また、そもそも「B」で文化元年十一月に三十巻分が刷り上ったとしているが、翌年に重豪に奉ったのは二十巻分というのはどうしてなのか。この他にも、初印本が「鹿児島藩蔵版」と見返しにある本であるとするなど誤りも見受けられる（後述）。いま改めて成立の過程を整理しておく必要があるであろう。『成形図説』成立に関する資料で上野が用いたものは、次の四点である。

- ①曾槃「成形図説提要」（『成形図説』巻一冒頭、文化元年甲子十一月朔旦）
- ②曾槃「成形図説編次の因」（『成形図説』巻三十一冒頭、天保二年六月）
- ③曾槃「成形実録改撰 第十三條」（『仰望節録』天保三年刊）
- ④白尾国柱「白尾氏家譜抄書」（東京大学史料編纂所蔵、島津家本）

曾槃は②において「臣曾槃三十年前に、南山老公より此書編集の命を蒙、文化丙寅のとしまでに凡三十巻をえらびて以往、竹芝の西邸に編集局をもうけ木に付したり」と述べている。三十年ほども前のことを記したものであるが、丙寅の大火までに三十巻を撰んだというのは間違いなからう。しかしながら、注意すべきは大火までに「三十巻」分の板木を完成させたとは言っていないということである。三十巻の原稿は完成をみたが、三十巻分の板木がすべて完成したのは大火以後の可能性が高いと思われるのである。その根拠は、上野も言及しているが、白尾国柱が土蔵に封じて火災の難を逃れさせた「板木六百枚」である。この板木の枚数によって、当時の完成していた板木の数を推定できるように思う。上野は右の引用の最後の部分で、「一丁分一枚」として計算し二十巻分の板木が土蔵に収められたとした。しかし、編纂の責任者の一人である白尾国柱が、完成した板木の一部を漏らして土蔵に封じたとは考えにくい。もし失われたのなら後年そ

の事実に対する言及があつてもよい筈であるが、それが無いのもその証左である。この六百枚の板木が当時完成していたすべてと考えるのが自然であろう。では、その中身であるが、『成形図説』の全丁数は上野が指摘しているとおりである（ただし、後印本には巻一に「前編總目」八丁が加わるがここでは考えない）。農事部と五穀部（二十巻まで）の丁数は、七百三十三丁である。一丁分一枚と考えると百三十三枚板木が足りない。一枚の板木に対しては、表裏それぞれに一丁分を刻するのが常套であるので、六百枚の板木とは倍の千二百丁分に相当するものと思われる。三十巻分の丁数が千七十五丁であるから、一見すると三十巻分相当と見積もられるのであるが、『成形図説』の初印本が色刷本であつたことを考慮しなければならぬ。つまり、色板の数を見積もる必要があるのである。見開き一丁の絵の場合は板木二枚分と計算すると、農事部、五穀部には、板木ベースでそれぞれ七十九枚、三十六枚分の絵（合計百十五枚）が存在している。一枚の絵に対して、平均三種類の色が使われるとすれば、三百四十五枚の半分、すなわち百七十二・五枚の色板が使われることになる。四種類とすれば、二百三十枚である。色板以外の板木が、三百六十六・五枚であるから、色板を合わせるとおよそ六百枚、二十巻分の板木に相当するものと推定しうる。上野の推定と、結果的に同じになったが、このように計算してみると色板が実に大きなウエイトを占めているかが改めて理解できる。色刷本というのはこれほどに贅沢な品なのである。

以上、文化三年三月の大火までに完成した板木は二十巻分である可能性が高いことを述べた。文化三年以前に四十巻分の板木が完成したとするのは、この火事で焼失してしまったということを考えない限り無理なのである。

一方、西尾市教育委員会岩瀬文庫本の巻三十裏表紙見返しには次のような貼紙（竪十四糎、横十三・七糎、墨刷）が残っている。

薩州藏版成形圖説全百卷

第一集十卷 農事 成

『成形図説』版本考

第二集十卷 農事 五穀 成

第三集十卷 蔬菜 成

第四集十卷 藥草 近刻

右十卷一集

定價金二分二朱宛

『成形図説』の版本は、卷一―卷十四が農事部、卷十五―二十が五穀部、卷二十一―三十が蔬菜部であるが、右の貼紙から一集十卷のまとまりで販売されていたこと、その値が各々金二分二朱であったこと、第四集として藥草部十卷が計画されていたことがわかる。先に卷二十一―三十は文化三年の江戸大火以降に刻されたと推定した。

色刷本にも彫刻の段階で生じたと思われる匡郭の傷や欠損が多数存在し、墨刷本に受け継がれていくが、色刷本にはなく墨刷本に見られる大きな欠損は、卷八、二十二丁表の右上匡郭の欠損である（表2参照）。調査した墨刷本のうち最も早印本であると考えられる西尾市教育委員会岩瀬文庫・祐徳稲荷資料館中川文庫・長崎県立図書館の各蔵本にもこの欠損が見える。この傷は白尾国柱が差配して土蔵に封じた際に出来た欠損であると考えられないだろうか。

曾槩の『仰望節録』（天保三年刊）所収「成形實録改撰 第十三條」には、次のようにある（句読点を補う）。

此書四十卷鏤版なりしに、文化三年丙寅のとし三月四日高縄手の海濱より祝融の災おこりて芝邸延焼す。是に於て姑く編集局を収め、属吏數人歸 國を 命ず。但^{臣槩}一人をして後編を編集せしむ。何ぞ圖^{ハカラ}む、文政己丑の災に印版十卷火に亡びたり。底稿もまたしかり。

従来「四十卷鏤版なりしに」という記述から文化三年以前に板木四十卷分が完成したものと捉えられてきたように考えるが、これは『成形図説』全体の中で板木に刻したのが四十卷分であるという事実を示したものと解釈すべきであろう。

文中「印版十卷」とあるのは、三十一から四十巻の薬草部を意味しよう。というのは、仮に二十一から三十巻がこの「印版十巻」だとすれば、その後この部分は改めて刻されたことになるわけだが、現存する刊本の匡郭の状態を子細に調査すると、同一の板木で刷られたことがわかり、改版の徴証は得られないからである。

「印版十巻」は刻成した（あるいはその途上だったか）ものの、文政十二年（三月二十一日）の大火により印版と原稿が焼亡したとあるからは、「第四集十巻近刻」という値段表が付いた岩瀬文庫本は、文化中期から文政後期の時点で印刷されたものと考えることが可能であろう。

次に、板木成立に関する事項を年表風にまとめておく。

文化元年十一月 曾繁「成形図説提要」執筆（①）

文化二年五月 重豪に二十巻を奉呈（④）

（稿本完成 板木二十巻分完成）

文化三年三月四日 丙寅の江戸大火、板木六百枚を土蔵に封印（④）

（薬蔬部十巻板木完成）

（薬草部十巻板木完成？）

文政十二年三月二十一日 江戸大火

「印版十巻」焼失（③）

3. 版本の分類

数ある『成形図説』の版本を、刷りの早晩を中心に、表紙、見返しの形式をも参考にしながら、以下に述べるように数種類に分類する。

末尾に付した表2は筆者が実際に調査を行なった版本を、色刷本と墨刷本とに大別し、表紙・見返しの形態、板木の匡郭の欠損等に着目し、その印の早いものから順に並べたものである（但し、色刷本については比較が困難であるため、今回は早晩の決定を試みていない）。以下、これに解説を加える。

〔1〕 色刷本

まず、鹿児島大学附属図書館玉里文庫（天19465）の書誌を掲げる。

体裁：大本（縦二十六・六糎、横十八・四糎） 三十卷三十冊

表紙：原表紙 山吹色檀紙表紙

題簽：原題簽 表紙左肩 赤色地（但し褪色） 四周双辺子持ち枠（縦十七・二糎、横三・一糎）

外題：（題簽）「成形圖説 農事部 一」

見返：白無地

前付：「成形圖説提要」「文化元年甲子十一月朔旦 臣曾槃謹記」

内題：「成形圖説提要」（序題）「成形圖説卷之一終」（尾題）

柱刻：「成形圖説提要 （丁付）」「成形圖説卷之一 （丁付）」

丁付：（柱）

本文：成形圖説提要（五丁）・成形圖説卷之一目録（半丁／半丁白）・本文へ最初に「享和二年壬戌秋八月穀旦 臣藤原國柱謹識」・（以下各巻頭に目録あり）

挿絵：色刷（ただし、巻二十一～三十は手彩色）。巻十六（十六才）の絵に「法橋洞龍美清筆」。

匡郭：単辺（縦二十二・一、横十四・九糎）（提要二丁才）

刊記：なし

印記：「鹿児島大學附属圖書館藏書印」（朱、長方）

備考：巻一（十八才、三十七才）、巻二（二ウ、三十八才）、巻四（五才、七ウ、十四才、二十六才、三十才、三十六才）、巻八（十五才）、巻二十（六才）の喉に、画工名「彫工 藤田金六」。

これは「挿畫に繪具もて色どりしものは諸侯方への贈呈品なりし由^③」というように、大名や貴族への献上用として作られた特製本^④と考えてよいだろう。実際、調査した中では、玉里文庫本の他に、静嘉堂文庫本^⑤・筑波大学附属図書館本・刈谷市立図書館村上文庫本・東北大学附属図書館狩野文庫本・東京大学総合図書館本^⑥・内閣文庫本・国立歴史民俗博物館本・鹿児島県歴史資料センター黎明館本・杏雨書屋本等が、このグループに属する。玉里本はいうまでもなく玉里島津家の旧蔵書であり、筑波大本は大和高取藩主の所蔵にかかるもの、刈谷本は刈谷藩の藩校文禮館蔵書、内閣文庫本は幕府書物方蔵本であった。巻一、巻十一の本文初丁に「薩摩／藏板」の朱文正方印が捺されている（静嘉堂本、黎明館本、歴博本等）。題簽は赤色地の子持ち枠、見返しは白無地、多色刷の挿絵には「彫工藤田金六」と喉にある。この色刷本は、挿絵一葉に対して数枚の板を必要とするほどに、金と手間をかけて整版印刷の技術の粋を集めたものとなっていることは先に触れたとおりである。

色刷本の特徴の一つは表紙の色が山吹色であることであるが、これは卷二十までであつて、卷二十一以降は色刷でも黄色（レモン色）である。また、色刷本の中には一まわり大きいものが見られる（歴博本・黎明館本）。一般には玉里本のように豎二十六・六糎、横十八・四糎であるのに対し、歴博本は豎二十七・二糎、横十八・八糎（但し、卷二十一以降は豎二十六・六糎）である。なお、卷二十一～三十が色刷本であるのは、静嘉堂本と内閣文庫の一本と歴博の一本のみである。多くは、卷二十巻まで色刷、残りの十巻はこれを欠くか色刷ではないかのどちらかである。これは、前述したように、菜蔬部卷二十一～三十が、これより遅延したことに由来すると思われる。⁽⁷⁾

〔2〕墨刷本

□黄色檀紙表紙（見返し白無地）本

題簽は白地または花浅葱色、見返しは色刷本同様に白である。色刷本にはなかった「成形圖説前編總目」（七丁半）が「成形圖説提要」（五丁）と「卷之一目錄」との間に挿入されている。この「總目」は、卷二十までの目錄であり、後述するように、後編二十巻を想定していたためであろう。ここに含まれる版本は、おおよそ前述の二度の大火の間に刊行されたものと考えることができる。

色板が省略されるのは普及版のためかと思われるが、本によっては色刷が残っている場合がある。先述の岩瀬文庫、長崎県立図書館、祐徳稲荷資料館の蔵本は、卷七の二十九丁裏・三十丁表の図のみに、褐色の線を残している。当該図は、中国の殷代の田と周代の田の大きさを比較したもので、殷田を示す褐色の線を省略してしまったら図は意味をなさない。しかし、色刷本以外と右の数本を除くほとんどの本はこの褐色の線を省略する。

このように岩瀬文庫・長崎県立図書館・祐徳稲荷資料館の蔵本は、それぞれ若干の異同が見られるものの、例えば同体

裁の本にも見られる卷二十の三丁表の匡郭右下の切れがないことから分るよう比較的早い時期の刷りと見られる。

同じ黄色檀紙表紙の本でも、書型がやや小さいものが見られる。都立中央図書館加賀文庫本・国会図書館本がこれに該当する。岩瀬本をはじめとするグループが竪二十六・六糎、横十八・四糎であるのに対し、竪二十五・七糎、横十八糎ほどのスケールであること、また題簽の筆耕が異なっているのが特徴である。

国書刊行会刊の影印本は、「文政十一年戊子年／薩州御藏版／成形圖説 全三十卷／賣弘所 江戸下谷 御成通 青雲堂英文藏」の刊記を持つものであるが、この刊記を持つ本は予想外に伝本が少ない。

黄色檀紙表紙本を持たないもの（灰色菊花唐草表紙等）もあるが、次項以下の見返しをもつものと区別して、この部類に入れておく。

□薩摩府學編集本①

表紙は黄色檀紙表紙で、題簽は浅葱色地。卷一の見返しに「薩摩府學編集／成形圖説／第一帙」とある。同様に卷十一、卷二十一のそれぞれの見返しにも、「薩摩府學編集／成形圖説／第二帙」「薩摩府學編集／成形圖説／第三帙」とある。卷八の二十二丁表の匡郭の天部右に大きな切れがある。また、卷二十一の題簽の右匡郭に切れがある。

□薩摩府學編集本②

見返しに「薩摩府學編集／成形圖説／第 帙」とある。但し、卷十一、卷二十一にはこの見返しはない。

卷二十一の題簽の右匡郭、および卷三十の題簽の左匡郭に四箇所欠けがある。

卷八の二十二丁表の右上匡郭に大きく切れがある。

大阪府立中之島図書館本は黄土色布目表紙、鹿児島大学附属図書館玉里文庫本は縹色檀紙表紙。研医会図書館本は替表紙にてもとの表紙の形態は不明。

□薩摩府學藏版本

(a) 布目模様黄色表紙、(b) 小葵文繋ぎ艶出し縹色表紙、(c) 灰色地青色菊花唐草模様表紙の三種がある。(a)は、現在のところ東大総合図書館本のみに備わるものであるが、(b)は、『施治肇要』(安政五刊)、『職原抄私記』(元治元刊)、『軍防令講義』(慶応二刊)、『慈徳公遺事』(明治二刊)といった薩摩府學藏板本の表紙と同系統の表紙を持つものである(ただし、色には差違がある)。

見返しに「全部百卷 上梓三十卷／成形圖説／薩摩府學藏板(印)「薩摩府／學刊行」とあるのがその特徴で、その右上に多く魁星印が捺されている。これは、馬に乗った人物と星をあしらったものである。大阪府立中之島図書館蔵本(81043)にも、見返しは白だが、第一丁の表に同様の魁星印を捺してある。題簽の匡郭(四周双辺子持ち枠)のうち、卷二十一の右、卷三十の左の匡郭に埋木(二箇所)と切れがある。また、卷八の二十二丁表の天部右側の匡郭が、埋木補修されている。これは、後述の黄色唐草艶出表紙の鹿児島藩版に受け継がれていく特徴であり、また、騎乗の人物を描く魁星印は、天保・安政にかけて刊行された本に捺されているので、(b)の表紙を有する本は、おおよそ安政・慶応の頃に印行されたものと考えることができる。

前掲『薩摩博物学史』では、「この本(引用者注——文化元年に刷り上がった初印本)は「鹿児島藩蔵版」と題し(見返し)、それよりのちの流布本が「薩摩府学蔵版」と題するのと異なる」とするが、見返しが付けられるのは時代が下つてからのことであるし、後述するように、「鹿児島藩蔵版」を唱えるのは明治になってからである。

□鹿児島藩藏版本

ここに属する版本は、装丁、表紙、見返し、刊記等にその特徴を見出すことができる。

まず表紙は、その多くが唐草模様艶出し黄色表紙である。装丁は、他の版本が四ツ目綴であるのに対して五ツ目綴であることが特徴である。また、題簽の匡郭（四周双辺子持ち枠）のうち、卷二十一の右、卷三十の左（二箇所）に埋木がある。これは先に見た欠損の場所と同じであり、刷りの先後を決定する目安のひとつとなる。

次に見返したが、卷一の見返しは「文化紀元甲子歲鐫 全部百卷／上梓卅卷／成形圖説／鹿児島藩藏版」となっている。『成形圖説』の刊年を文化元年とするのは、この見返しの影響が大きいと言えるが、実際の完成がこれより少し遅れるのは前述の通りである。左下に「鹿児島藩藏版」（朱文長方）の藏版印のあるものとないうものがある。提要の初丁などに七・六・五・四・三・二・一の印「鹿児／島藩／藏版」（朱文正方）が見られるものもある。また、右上に魁星印の捺されたものがある。この印は幕末の薩摩藩および明治初年の鹿児島藩版に多く見られるものであるが、明治五年刊（明治九年板もあり）の鹿児島縣刊『文章軌範評林』にもあるように鹿児島県版にも引き継がれている（後述）。

卷三十の裏表紙見返しに「鹿児島藩藏書取次所／阪府書林 南久太郎町一丁目 相屋九兵衛／堺筋通清水町 伊豫屋善兵衛」と刊記を載せる。この二書肆連名の刊記を有する鹿児島藩版には『鼈頭増補字林玉篇』（明治四年刊）があり、相屋が製本調進所になっているものに、鹿児島藩国学局藏版『神習草』（明治三年三月刊）、『文章軌範評林』（明治九年五月版權免許）・『新鐫讀本五經』（明治九年五月版權免許）がある。

相屋（田中）九兵衛は『大坂本屋仲間記録・出勤帳』⁹によれば、「○明治三年十二月三日 一、新加入之分、近万・相九・河八十七、并二夫々張紙致候事」とあるように、明治になってから仲間に参入している。参入以前の活動は不明ながら、「河八十七」が古本屋を営んでいたことから、相屋も古本あるいは貸本、また本の卸をしていたものと推測する。さ

て、この相屋は、参入早々、鹿兒島藩（県）と結んで活発に活動しているが、その詳細については、別稿で考えたい。¹⁰⁾

また、伊豫屋善兵衛は『改訂増補 近世書林板元總覧』（青裳堂書店）にも見えず、確認できた刊行物も「改正刪補日夜重寶萬曆両面鑑」（文久元年）という一枚摺と『二千年袖鑑 二編』（慶応二年）のみである。刊行物からみると、極めて弱小の本屋と言わざるを得ない。後者の『二千年袖鑑』は、歴史的事件などが何年前のものを一覽にした画帖綴じの小冊子であるが、この表紙は唐草模様艶出しの紺色であり、幕末から明治初年にかけて伊豫屋がその製作に關与した本にはこの模様が空刷されたものだろう。少なくとも本の調製に關しては大坂で行なわれた可能性が強いことを示しており、大坂の新興書肆との結び付きがかなり強いものであったことが分るのである。

一方、農書の専門書肆有隣堂¹¹⁾が流通に關与していることも判明する。たとえば、内閣文庫の一本（264・24）には、卷三十の裏見返しに「東京書肆／ 有隣堂章」と印刷されたシールが貼つてある。また、卷一には仕入れ印「若源」（小判形）とともに「丑十二田中入／マ正レヤ○」とある。この「田中入」というのは、明治五年刊『文章軌範評林』の刊記に載る、相屋（田中）九兵衛の東京支店と推測される。同様に、滋賀大本にも、卷三十の卷末に「農業書肆／有隣堂」の朱印が捺されている。

この唐草模様黄色表紙の鹿兒島藩版は、明治初期に大坂で印刷され、大坂の書肆が売り広めに關与したものである。つまり、幕末の動乱期に江戸藩邸の藩邸機能を上方向へ移した際に、恐らくは蒸氣船を利用して航路大坂へ版木を移動させ、その後息のかかった書肆に売り広めを命じたものと推定される。

なお、昭和八年、國本出版社刊の影印本はこの「鹿兒島藩版」を底本としている。

4. 薩摩藩（鹿児島藩、鹿児島県）版の魁星印について

幕末から明治にかけて刊行された薩摩藩（鹿児島藩、鹿児島県）版の多くには、見返しに魁星印の捺印されているものがある。魁星印とは、見返しの右肩に「文章を司る星として縁起を担いで捺される」印であり、中国の俗書の習慣を持ち込んだものである。⁽¹²⁾ 薩摩藩（鹿児島藩、鹿児島県）版には、（a）騎乗の人物と星をあしらったもの、（b）「文命敷四海」、（c）「人能弘道」⁽¹⁴⁾（d）「天地経緯」⁽¹⁵⁾という四種類の魁星印（いずれも円印）が見える。これらは、『書経』『論語』『春秋左氏伝』の文句を採ったものであり、文徳を普く行き渡らせるといふ編纂の目的を明らかにしたものである。

これら魁星印の捺されている藩版、県版を調査することにより、『成形成図説』でこの印を持つグループの発行年代を推定することが可能になるかと思う。⁽¹⁶⁾

表1 魁星印の捺された薩摩藩（鹿児島藩・鹿児島県）版

書名(刊年)	魁星印	所蔵者
孝経(天保十三)	〔騎乗の人物〕	鹿児島県立図書館 ⁽¹⁷⁾ (以下「鹿児島県立」)
古文孝経(嘉永三)	〔騎乗の人物〕	鹿大玉里・尚古集成館・黎明館
山崎嘉點・易経(嘉永七)	〔騎乗の人物〕	鹿大玉里
春秋左氏傳(安政五)	〔騎乗の人物〕	鹿児島県立
三字経(明治三)	〔人能弘道〕	鹿児島県立・鹿大玉里・尚古集成館
智環啓蒙(明治三)	〔人能弘道〕	鹿児島県立・尚古集成館・黎明館
鼈頭増補字林玉篇(明治四)	〔人能弘道〕	鹿大玉里・丹羽
標題箋註蒙求讀本(明治四)	〔天地経緯〕	丹羽
標題箋註蒙求讀本(明治四)	〔人能弘道〕	鹿大玉里

公私日用文章(明治四)	「人能弘道」	尚古集成館
讀本十八史略(明治四)	「人能弘道」	丹羽
改正博物新編(明治四)	「人能弘道」	黎明館
女小学教草(明治五)	「人能弘道」	鹿児島県立・静嘉堂文庫
増補元明史略(明治四)	「人能弘道」	鹿児島県立・丹波
大統歌(明治)	「人能弘道」	鹿児島県立
島津歴世歌(明治)	「人能弘道」	鹿大玉里
女大学(明治)	「人能弘道」	鹿児島県立
女小学(明治)	「人能弘道」	鹿児島県立
改正小學句讀(明治)	「人能弘道」	丹羽
文章軌範評林(明治九)	「人能弘道」	丹羽
新鐫讀本五經(明治九)	「人能弘道」	丹羽

今のところ、魁星印の捺されたものの内、天保十三年の『孝経』が最も古い。この時期は、世子ながら島津斉彬が盛んに四書五経の出版を目論んでいた時期である。⁽¹⁸⁾ 一方、表2で明らかのように『成形図説』では、卷八の二十二丁表の匡郭の欠損を埋木補修した時期と合わせるかのように、魁星印(a)が捺されるようになることがわかる。島津斉彬によって出版事業が拡大する時期と重なることを考えると、板木の傷みを修復し魁星印を捺して書籍の普及に努めたのは斉彬と考えることもできるのではないだろうか。いずれにせよ、「薩摩府学蔵版」本は天保末から幕末にかけて印行されたものと判断してよいかと思われる。ここで注意すべきは、魁星印が捺されるのが四書五経や教科書、教訓書の類であり、同じ薩摩藩版でも『遠西奇器述』(嘉永七刊)、『航海金針』(安政四刊〔推定〕、木活字版)などの科学書、あるいは『泰清公遺事』(明治元刊)、『慈徳公遺事』(明治二刊)には見られないことである。幕末明治刊行の『成形図説』は、四書五経など

と同じく藩士の教育に資するべく刊行された書籍と認識されていたと言えようか。

なお、明治期の「鹿児島藩（県）蔵版」本には魁星印（b）（c）（d）が捺されるが、三者がどのように区別されていたのかは明確なことはわからない。

5. おわりに

膨大な数にのぼる『成形図説』の板木の行方については明らかではないが、明治初年にいたるまで少なくとも七十年以上にわたって同じ板木を用いて摺刷されつづけてきたことは間違いない。土屋喬雄が指摘しているように、明治十一年（二八七七）内務省勸農局刊行の『農書要覧』では『成形図説』を筆頭に掲げている。明治政府の勸農事業は大久保利通ら多くの旧薩摩藩士のリーダーシップのもとに推し進められたことを考えると、抛るべき書物の第一が本書であったことは必然であった。明治十一年三月に内務省御用掛に就任した奈良原繁は、『内洋経緯記』『薩藩経緯記』など佐藤信淵の農書を有隣堂から刊行させている。秋田の学者佐藤信淵が薩摩藩に多大な影響を与えていることを考える時、その影響が明治の勸農政策にも及んでいるのは理由のないことではない。このように殖産興業政策という追い風を受けて、農書が多く刊行され普及していったが、既存書ながら『成形図説』がその中で重要な位置を占めていたことは、表2の旧蔵者を見れば明らかであろう。

本稿は、書誌調査に基づいて『成形図説』版本の分類を試みるとともに、その成立過程について検討を加えたものである。本書の挿絵や引用書についての問題など、なお検討すべき課題は多い。後考を期したい。

— 注 —

（1）片山信太郎「薩摩版に就きて」（『図書館雑誌』二十五号、大正四年十二月）に「目次の下に薩摩蔵板の朱印ありて、挿畫に繪具も

て色どりしものは諸侯方への贈呈品なりし由。藩士などには色取らざるものを給はりし由。」とある。また、「南山俗語考、是には成形圖説に三種あるが如く、同じく三種あるが如し。」と『成形図説』が三種類あるように書いているが具体的な指摘はない。

(2) 昭和五十七年、島津出版会刊。二百二十一―二百二十二頁。

(3) (1) に同じ。

(4) 特装本には、普通本屋の手を経たという形跡が認めがたいのであるが、歴史民俗博物館本(H161)には、書肆のものと思しき符丁と、二種の墨印が捺されている。一つは印文が不明ながら、いま一つは「須原／仕入」である。新刊書としてではなく、古書として払い下げられ須原屋の手に入ったと考えられぬこともないが、色摺の特装本が書肆の流通機構に乗るものであったと考えるのが妥当であろう。

(5) 静嘉堂文庫には、二種あり。一本は色川三中旧蔵本、もう一本は重野成斎旧蔵本(卷三十まで)に卷三十一―四十五の写本を加え、同一の表紙(菱の模様)で改装したもの。後者の刊本部分が色刷本である。

(6) 請求番号(XA10-925)、旧刈屋藩士で東京府や大蔵省の官僚であった六戸昌の旧蔵書。

(7) 加藤雄吉編『近世薩州群書一覧』(鹿児島県立図書館、孔版、刊年不明)にも「二十卷成りて呈上せしは文化二年五月也(二十一卷より三十卷迄の成りし年月は不明)」とある。また、上野益三『薩摩博物学史』(島津出版会刊)では「文化二年五月にその最初の二十卷本を藩主重豪に呈上している。これは上梓三十卷のうちの版本で、残り十卷はおくれた。」とある。いずれも『白尾氏家譜抄書』に依った記述と思われる。

(8) この表紙を有するものの中には「薩摩府學蔵版」と明記されないもの、すなわち見返しが白のものも含まれる。

(9) 第六卷、昭和五十九年、清文堂出版刊。

(10) 相屋の活動として注目されるのは、『文章軌範評林』(明治九年五月)刊記に見られるように、東京に支店を出し、三都の書肆と

提携、従来の本屋仲間のネットワークを利用して販売を行なっていることである。また、明治九年には、重野安繹（成翁）と組んで『編年日本外史』（十六巻、初版は未見、明治十四年の頼復の序文を持つ玉里文庫本を参照した）を刊行している。重野安繹の跋によれば、本書の成り立ちは「…朝廷新革学制。專取法西洋抱古經講古道者。概廢于世。閑散多暇。余乃與諸子謀。將校定童子課讀書。付之書買某。挨次刊行。以資餬口。因創一社。命曰光啓社。取光前啓後之語也。…」という。刊記には相屋（田中九兵衛）は藏板人として名前が出ている。

(11) 有隣堂は、東京書籍組合編『東京書籍商伝記集覧』（青裳堂書店刊）に依ると、明治七年二月十八日創業、初代穴山篤太郎は元大和郡山藩士で、藩の勸業や地方の行政に参与、辞した後、京都の書肆村上勘兵衛で修業、同店東京支店に勤めた。のち、独立して京橋区南伝馬町二丁目十三番地に開業。殖産興業に関する出版と販売を行なっている。

(12) 中野三敏『江戸の板本』（一九九五年、岩波書店刊）

(13) 『書経』大禹謨の「文命敷于四海、祇承于帝」による。

(14) 『論語』衛霊公篇「子曰、人能弘道、非道弘人」による。印文の「道」の字形だが、四つ辻を表わす「行」の間に「人」が入っており、意味として「道」を表わす（高津孝氏の御教示を得た）。

(15) 『春秋左氏伝』昭公二十五年「禮上下之紀、天地之経緯也」によるか。

(16) 魁星印と出版の年次とは必ずしも正確に対応するとは限らないが、ここでは、サンプルを多く蒐集することにより、ある程度は対応関係が明らかになったと考える。

(17) 鹿児島県立図書館には、五部所蔵されている。そのうちの一部には、魁星印も藏板印もない。また、三部には「（騎乗の人物）」の魁星印と「薩摩府／學刊行」印があり、さらにもう一部には「人能弘道」の魁星印および「鹿児島／縣刊行」の印がある。最後のものは明治の印行であろう。

(18) 薩摩府學蔵版『四書集注』は弘化二年の刊行である。

(19) 土屋喬雄「成形図説について」(『成形図説』昭和四十九年、国書刊行会刊)

(20) 奈良原繁の履歴については、長岡由秀『生麦事件 血の迷宮』(平成十八年、高城書房刊) 所収の年譜を参照。

(付記)

書誌調査に際し、多くの機関にご高配を賜った。また、鹿児島大学附属図書館には図版掲載の許可をいただき、高津孝、中筋健吉、内山弘の各氏には調査中種々のご助力を賜った。ここに深甚の感謝の意を捧げる次第である。

肥くは茶栽疏くく。○樟樹桑茶櫻桐栗并橘樹類ハ大
あまそりの平山ふ宜一樟ハ樹木と擇より苗の時ふ
わくべし海邊に付樹と種を宜しき土に種を植ふと利
あり桐樹ハ新蕪を最ふくし田畠に植ふと枝葉茂茂と
いふと其の地物を養ふにふくし又松樹をの大
本田地に落さず時ふに栽疏く好くするは本村を拂
ひ日氣と樹をふくしきなり。鹽鉄論云茂木之下無凡耕
地不樹木を植ふれは本村水やう不足く潤沢な
るふくしや土地平よりて暖き田畠よりて冷き田神ふ
るの茂る杜林よりて冷き田畠ハ炎天の頃ハ地

図版 2 『成形図説』（玉里文庫本3298A）
巻 8・22丁表

肥くは茶栽疏くく。○樟樹桑茶櫻桐栗并橘樹類ハ大
あまそりの平山ふ宜一樟ハ樹木と擇より苗の時ふ
わくべし海邊に付樹と種を宜しき土に種を植ふと利
あり桐樹ハ新蕪を最ふくし田畠に植ふと枝葉茂茂と
いふと其の地物を養ふにふくし又松樹をの大
本田地に落さず時ふに栽疏く好くするは本村を拂
ひ日氣と樹をふくしきなり。鹽鉄論云茂木之下無凡耕
地不樹木を植ふれは本村水やう不足く潤沢な
るふくしや土地平よりて暖き田畠よりて冷き田神ふ
るの茂る杜林よりて冷き田畠ハ炎天の頃ハ地

図版 1 『成形図説』（玉里文庫本465）
巻 8・22丁表

肥くは茶栽疏くく。○樟樹桑茶櫻桐栗并橘樹類ハ大
あまそりの平山ふ宜一樟ハ樹木と擇より苗の時ふ
わくべし海邊に付樹と種を宜しき土に種を植ふと利
あり桐樹ハ新蕪を最ふくし田畠に植ふと枝葉茂茂と
いふと其の地物を養ふにふくし又松樹をの大
本田地に落さず時ふに栽疏く好くするは本村を拂
ひ日氣と樹をふくしきなり。鹽鉄論云茂木之下無凡耕
地不樹木を植ふれは本村水やう不足く潤沢な
るふくしや土地平よりて暖き田畠よりて冷き田神ふ
るの茂る杜林よりて冷き田畠ハ炎天の頃ハ地

図版 3 『鹿児島藩版 成形図説』
巻 8・22丁表
(國本出版社・昭和 8 年刊より)

表2 『成形成図説』の版本一覽

所蔵（請求番号）	前編総目	表紙	巻一見返し	巻八・22丁表 の匡郭の切れ	備考	
内閣文庫（196-102）	なし	山吹色・檀紙	白	なし	巻二十一〜三十は黄色表紙	農商務省図書。
鹿児島大学玉里（465）	なし	山吹色・檀紙	白	なし	巻二十一〜三十は手彩色。	
刈谷市立図書館村上文庫	なし	山吹色・檀紙	白	なし	巻一〜二十存。「薩摩藏版」印あり。	
筑波大学図書館	？	山吹色・檀紙	白	？	巻二十一〜三十は黄色表紙。	
東北大学狩野文庫	？	？	白	？		
静嘉堂文庫（Z-1）	なし	替表紙	白	なし	「薩摩藏版」印あり	
東京大学図書館（XA10-925）	なし	黄色・檀紙	白	なし	合本改装。巻十一〜二十欠。	寶玲文庫旧蔵。
国立歴史民俗博物館（H161）	なし	山吹色・檀紙	白	なし	「薩摩藏版」印あり	
鹿児島県歴史資料センター黎明館	なし	黄色・檀紙	白	なし	巻一〜十存。「薩摩藏版」印あり	
杏雨書屋（吟1118）	なし	黄色・檀紙	白	なし	巻一〜二十存。巻十一〜二十は山吹色檀紙。「薩摩藏版」印あり。	
杏雨書屋（吟4328）	なし	黄色・檀紙	白	なし	巻一〜二十存。「薩摩藏版」印あり。	
学習院大学図書館	なし	山吹色・檀紙	白	なし	巻一〜十存。	
天理大学天理図書館（610-11）	前編総目	黄色・檀紙	白	なし	巻一〜二十存。「薩摩藏版」印あり。	
福岡市博物館（収蔵品目録6・書籍14）	なし	薄黄色・檀紙	白	なし		
岩瀬文庫	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	巻一〜二十存。	
祐徳稲荷資料館中川文庫	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	巻十一〜十七、二十一〜三十存。	
長崎県立図書館	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
鹿児島大学玉里（3298C）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	巻十一〜二十は手彩色。	
京都大学図書館（9/20/P15）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	刊記「文政十一年・・・英文蔵」二冊ずつ合本。	
京都大学経済学部（17/5-2/s）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
大阪大学図書館懷徳堂文庫	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
杏雨書屋（吟151）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
東京国立博物館（と2763）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
鹿児島大学図書館（旧高等農林本）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
大阪府立図書館（810/4/2）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
京都大学図書館（9/20/セ5）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	巻一、二、十七、十八欠。	
京都大学人文科学研究所	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	刊記「文政十一年・・・英文蔵」	大学南校旧蔵
東京都立中央図書館加賀文庫	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
国会図書館（145-1）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
国立歴史民俗博物館（H-748）	前編総目	山吹色・檀紙	白	切れ大		黒川真頼旧蔵。
杏雨書屋（吟1563）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		男爵田中芳男旧蔵
東京大学図書館（XA10-258）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大	二冊ずつ合本。	色川三旧蔵。
静嘉堂文庫（46-5）	なし	黄色・檀紙	白	切れ大		
尊経閣文庫（751-5）	なし	黄色・檀紙	白	切れ大		
鹿児島大学玉里（3298A）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		
鹿児島大学玉里（3298B）	前編総目	黄色・檀紙	白	切れ大		

研医会図書館	前編総目	(替表紙布表紙)	薩摩府学編集②	切れ大		
大阪府立図書館(朝日810/1)	前編総目	黄土色・布目	薩摩府学編集②	切れ大		地誌備用図書。
内閣文庫(196-96)	前編総目	浅葱色・檀紙		切れ大		
尚古集成館	なし	青色・菊花唐草	白	切れ大		
鹿児島県立図書館(成田氏)	なし	青色・菊花唐草	白	切れ大		
慶應大学三田メディアセンター	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	切れ大		
東京大学図書館(xa10-136)	なし	黄色・布目	薩摩府学蔵版	？	巻二十七、十九、二十、二十六、二十九存。	
東京大学図書館(xa10-25)	なし	黄色・小葵葉艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	伊地知峻旧蔵、寄贈。
大阪府立図書館(810/4/3)	なし	青色・小葵葉艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	宮城県勸業課旧蔵。
京都大学農学部図書館	なし	青緑色・布目蔓草	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	
東京大学経済学部図書館	なし	縹色・小葵葉艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	高崎家旧蔵。
秋田県立図書館	なし	藍色・小葵葉艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	
京都大学農学部(農林経済)	なし	灰色・菊花唐草	白	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	伊藤篤太郎旧蔵。
早稲田大学図書館(一一144)	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	農商務省旧蔵。
内閣文庫(196-98)	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	
内閣文庫(264-22)	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	静岡県勸業課旧蔵。
静岡県立中央図書館	？	？	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	富岡鉄斎旧蔵。
玉川学園大学図書館	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	
福岡市博物館(収蔵品目録1-書籍138)	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	
三重県立図書館	なし	黄色・布目菊花艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	
鹿児島県立図書館(県庁)	なし	灰色・菊花唐草	薩摩府学蔵版	埋木補修	巻一・十六欠(二十八冊)	鹿児島県庁旧蔵。
内閣文庫(196-100)	なし	青色・網目艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	修史館旧蔵。
東京大学農学部図書館	なし	深緑色・縦波艶出	薩摩府学蔵版	埋木補修	魁星印a「(騎乗の人物)」	農商務省旧蔵。
京都大学経済学部(17/5-2/se)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	刊記。	
九州大学図書館	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	巻一・二十三、二十五存。	
豊橋市立図書館	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印b「(文命敷四海)」	
伝習館高校対山館文庫	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	刊記。	彦根藩弘道館旧蔵。
滋賀大学図書館(教育学部)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印c「(人能弘道)」	太政官文庫旧蔵。
内閣文庫(264-24)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印b「(文命敷四海)」	内務省旧蔵。
内閣文庫(196-99)	なし	黄色・小葵葉艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印b「(文命敷四海)」	太政官文庫旧蔵。
内閣文庫(196-101)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印b「(文命敷四海)」	
内閣文庫(264-21)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印c「(人能弘道)」	
鹿児島県立図書館(県図)	なし	青灰・菊花唐草	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印c「(人能弘道)」	大坂博物場事務局旧蔵。
大阪府立図書館(810/4/4)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印b「(文命敷四海)」	
大阪府立図書館(810/4/1)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印b「(文命敷四海)」	
大阪大学図書館(6303/se)	なし	灰色・菊花唐草	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印c「(人能弘道)」	岐阜県農事伝修所旧蔵。
東京大学史料編纂所(島津家本)	なし	青色・小葵葉艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	魁星印c「(人能弘道)」	
内閣文庫(264-23)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修	刊記。	浅草文庫旧蔵
内閣文庫(196-97)	なし	黄色・唐草艶出	鹿児島藩蔵版	埋木補修		

・『成形図説』が一本しか所蔵されていない機関については請求記号を省略した。
・鹿児島県立図書館は同じ請求記号で複数存在するため、それぞれの蔵書印を目印として区別した。
・？は未調査の項目を示す。